



文化庁「文化遺産を活かした観光振興地域活性化事業」
淡路人形座・淡路の人形芝居復活公演

平成24年
2月18日 土

17:30開演

場所●南あわじ市三原公民館大ホール

1. ごあいさつ
2. 講演:淡路人形浄瑠璃の代表作「賤ヶ嶽七本槍」
大阪市立大学 久堀裕朗 准教授
3. 復活上演:「賤ヶ嶽七本槍」清光尼庵室の段

賤ヶ嶽七本槍

復活

清光尼庵室の段

■主催 / 財団法人淡路人形協会
■後援 / 兵庫県教育委員会
淡路市教育委員会
洲本市教育委員会
南あわじ市教育委員会
淡路人形芝居サポートクラブ
淡路文化協会
淡路文化団体連絡協議会
淡路素義審査会
淡路だんじり唄振興会

◎入場無料



南あわじの文化遺産を世界に発信！

財団法人淡路人形協会理事長（南あわじ市長） 中田勝久

今年、古事記編纂一三〇〇年にあたります。この歴史書の冒頭に書かれた国生み神話は淡路島が奈良時代から中央と深くかわって来た証です。穏やかな気候で、自然の恵みも豊かな私たちのふるさとには様々な芸能が根付き、祭礼でも豪華な布団だんじり、神輿、歌や舞、踊りが受け継がれています。その中でも淡路人形浄瑠璃は国指定重要無形民俗文化財として国内外に誇れる素晴らしい舞台芸術であります。またこの夏、淡路の文化遺産を国内外に発信するための淡路人形座の新会館が福良港でオープン予定です。

去る一月二十七日、二十八日に、国立劇場で淡路人形座の公演がありました。淡路独自の演目や演出を活かした復活公演が注目されたため、チケットは完売し、公演も好評であったそうです。満場の観客の熱気と拍手で淡路人形座も伝統を受け継ぐ責任と喜びを感じたことでしょう。中央でも淡路島の伝統文化を守る意気込みを知らせることができたことをうれしく思います。すばらしい文化を守り続けられる淡路島には、ほんものの野菜や海産物、加工食品、製品などがたくさんあります。ほんもの志向の島の文化の象徴が人形浄瑠璃だと思いました。

平成二十三年度も文化庁のご支援を得て、人形浄瑠璃の研究者や実演を指導してくださる専門家の先生方の御指導を受け、淡路人形座の座員も目覚ましい成長が来ました。座員や後継者団体の子どもたちをご指導いただいている鶴澤友路師匠は白寿を迎えられました。これまでの知識と技術は、今後、淡路人形浄瑠璃を受け継ぐ人材への大きな宝となることでしょう。

淡路島の大切な文化遺産に今後もより磨きをかけようと、淡路人形座の座員たちは今年度、淡路人形だけに伝わる「賤ヶ嶽七本槍 清光尼庵室の段」を上演しようと頑張ってきました。

由緒ある吉田傳次郎座のかしらたちが、舞台で輝く機会を得たことは、今を生きる私たちだけではなく、五百年間にわたって淡路人形に関わった大勢の方々の喜びであると思います。淡路島に素晴らしい文化遺産が残るのは、先人の芸芸伝承者と舞台を支えた人々だけでなく、人形芝居が大好きだった地元ファン層が厚かったお蔭であり、淡路島民の歴史でもあります。この煌く伝統のバトンを未来に繋げていくためにも人形芝居をみんなで楽しみましょう。

淡路人形浄瑠璃の代表作「賤ヶ嶽七本槍」

大阪市立大学 久堀裕朗

今回の復活公演で取り上げる『賤ヶ嶽七本槍』は、大坂初演の二作品『比良嶽雪見陣立』『太功後編の旗鷹』を取り合わせて成立した淡路座独自の上演外題である。原作の二作品は、一部の段を除いて江戸時代のうちに大坂での伝承が途絶えたため、本作は淡路座でしか上演されない独自の演目となり、近代になって淡路人形浄瑠璃の代表作の一つと目されるようになった。

昭和十年（一九三五）七月六・七・八日、大阪南地演舞場において、淡路人形浄瑠璃宣伝協会主催、小林六太夫座による「淡路人形浄瑠璃大会」が行われたが、このとき通し上演（四、五段を上演する準通し）された三作品（『源氏旗揚 奥州秀衡』『賤ヶ岳七本槍』『源頼朝公 富士巻狩』）は、当時大阪の文楽では観ることのできない、淡路独自の演目として選択されたものだったと考えられる。『賤ヶ嶽七本槍』はその内の一つであり、淡路座が売り物として上演できる代表的な演目であったわけである。

昭和四十年代、廃絶の危機に瀕する淡路人形浄瑠璃の記録を残すべく、国立劇場は本格的な上演を企画し、四十五年（一九七〇）四月四・五日に、第九回民俗芸能公演「淡路人形芝居」が行われた。その時の演目にも『賤ヶ嶽七本槍』が選ばれており（もう一つは『玉藻前囃子』、残念ながらその公演の映像は断片的なものしか残されなかったが、淡路人形浄瑠璃の残光として、人々の記憶に刻まれるものとなった）。

以後、今日につながる淡路人形座が昭和三十九年に開設されてはいたものの、右に挙げたような諸作を通し上演する力はなくなり、淡路座の多くの伝承は途絶えてしまった。しかし近年、淡路人形座は、淡路ゆかりの作品の復活上演に取り組みはじめ、『賤ヶ嶽七本槍』についても、平成十五年に山の段（勢揃）を、平成二十二年に勝久出陣の段を復活した。今回上演する清光尼庵室の段は、本作の中心となる三段目の切場であり（原作でも三ノ切）、これを加えると本作三段目以降が通して上演可能となる。また他の段の復活作業は残っているが、今日の公演を以て『賤ヶ嶽七本槍』は本格的によりみがえるのである。

『賤ヶ嶽七本槍』清光尼庵室の段

害になるとして、久吉は蘭の方の首を討つように
政左衛門に促していた。(以上、主に原作『比良嶽
雪見陣立』による。)

【床本】
清光尼庵室の段 口

【あらずじ】

これまでのであらずじ
本能寺の変で小田春永(織田信長)が命を落と
し、逆賊武智光秀(明智光秀)も滅んだ後、小田
家の跡目相続をめぐって、柴田勝家と真柴久吉(羽
柴秀吉)が争っていた。安土城(清洲城)の評議
では、柴田勝家が押し切って春永の次男春孝を跡
継に定めるが、その後の大徳寺における春永の法
要では、久吉が武力を用いて春永の嫡孫(死没し
た長男の子)三法師を一番に焼香させ、諸大名の
目の前で後継を宣言し、両者の対立は決定的なも
のとなった。

一方、柴田や真柴と並ぶ小田家の重臣であった
足利政左衛門時氏(前田又左衛門利家)は、小田
家の跡継を嫡流たる三法師に定めるべきと考えて
いたが、三法師が娘蘭の方の子であったため、安
土城評議の席では発言をひかえ、後継が春孝に決
まった後、その「非法の評議」を難じて席を立ち、
密かに三法師を領国の鏡山に連れ帰ってかくまっ
ていた(その後、大徳寺で久吉が一番に焼香をさ
せた三法師は偽者だった)。

そうした状況のもと、政左衛門の娘深雪は、大
徳寺の法要の日に、柴田勝家の息子勝久と出会い
恋に落ちるが、叶わぬ恋を苦に出家して尼となり、
鏡山の庵室にこもっていた。また深雪の姉蘭の方
も政左衛門に預けられてこの庵室に来ていたが、
小田家転覆を謀って失敗した滝川将監の養女とし
て小田家に嫁いでいたため、三法師跡目相続の障

清光尼庵室の段

柴田・真柴の戦いはじまる中、鏡山の頂ぎに
ある清光尼(深雪)の庵室に政左衛門が訪れる。「両
者の戦いを高みから見物する」と言つて腰元(夕霜
・小百合・呉服)に遠眼鏡を据えさせる政左衛門
であったが、意外にもかもしを取り出し、深雪に
強く還俗を求める。(以上、口)

久吉が三法師を連れて訪れ、蘭の方の首を早く
渡すよう迫る。承諾した政左衛門はしばしの猶予
を請い、久吉を奥で待たせる。

一方、遠眼鏡でいくさの様子を見ていた腰元た
ちから勝久が見えると聞いた深雪は、恋慕の情忍
びがたく、法衣を捨て、華やかな小袖に着替える。
そこに政左衛門が現れ、「蘭の方は実は義理の娘。
恩ある先代政左衛門の忘れ形見ゆえ、殺すわけに
はいかない」と述べ、身代わりになるよう説得す
るが、勝久に会いたい一心の深雪は拒否する。し
かし、やがて戦場から「勝久を討ち取った」とい
う声が聞こえてきたので、失意とともに深雪は身
代わりを受け入れ、政左衛門は深雪の首を討つ。

首実検のため久吉を呼んだ政左衛門は、偽三法
師を連れたい久吉が小田家を乗っ取るうとしてい
るのではないかと疑うが、久吉は三法師に扮した実
子の捨千代を討つ。子を犠牲に忠義を貫く久吉に
政左衛門も心を許し、三法師を託す。久吉は三法
師を抱き、馬に乗って安土に帰還する。(以上、切)

〽知られけり。

湖水より東に當つて。鏡山の巔に浮世離れし庵室
あり。主と言ふはそぎ尼にて。清光尼と聞こへし
は。足利政左衛門が深窓深雪姫。惜しや盛りを何
故ぞ、その源は恋草に。今は御法の花開く。春の
日永き庵かな。

「近習御入りなり」と案内させ。足利政左衛門尉
時氏。当代の英雄たれども。真柴によらず柴田へ
も組せぬ心、遠目鏡。手に携へて打ち通れば。

二人の姫は押し下り。「蘭今日はお氣もじいかゞ、
追つ付けお見舞にもと存ぜし所。」「政アイヤその
氣遣ひ無用。この頃政左衛門が病氣といつば、こ
の度小田家の変に乗じ。真柴柴田など、不忠不
義なる奴原が。某を巻添に引き入れんと。双方
から毎日の使者。相手になるも耳の穢れ。病氣を
構へ引つ籠れど。春の日の永きにモほつと退屈。

今日は天氣も打ち晴れたれば。思ひ寄つたこの遠
目鏡。近江一國は目の下に見ゆるこの庵。蝸牛虫
どもの角争ひ。高見から見物するはイヤモ究竟の
楽しみ。ソレ腰元ども。程よき所へ早く直せ」と。

言ひ付けられて立かゝり「夕爰らがよい」と夕霜
が。先づ一番に差し覗き。「夕ヤねつから向ふが見
へぬはいのふコレ小百合殿。」「小下レ／＼わしが」
と立かはり。「小ヤほんにこりやとんと見へませぬ」
「ア、コレ／＼小百合殿、見へぬ筈じやはいの
ふ、まだ朝霞が晴れぬもの。」「三人そんなら後に」

と目でしらせ。うなづき合て立ち退けば。

政左衛門気色を正し。「政それは格別。清光尼へは布施物あり、ア、それ／＼」と取り次がせ。様子は何か白木の箱、目通りに差し置かせ。

「政心を込めたる父が布施物。受け納めてくれずばなるまい。といふその子細は。先君春永公御他界ありしその後は。三法師君を御跡目にすへ奉らんと。日夜肺肝を砕くといへども。ただ口惜きはちぢまる齡、気はいら立。心のたけは百分が一行き届かず。哀れ力ともなさん者は。御身ならで誰かあらん。何と力となつて我が存念、立てさせてはくれまいか」と。様子有磯の海ならで。父の底意を探り兼ね。「深あるに甲斐なき女の身。何お力にならふもの。」「政イヤ／＼なるとも／＼ずんどなる。その仕やうこそまつ斯」と。拳を以て打つ箱の。開くる中に黒髪は。様子あらんと。窺ふうち。

「蘭ム、父上のお心は愚案ながら姉が悟つた。コレこの髪をかもじに入れ。妹に還俗させ、殿御を持たすお心よな。」「政ヲ、サ智を取るはさ。」「深エ、ヒエ、」「政イヤサ何驚く事やある。初花にひとしきあたら身を。何を不足の発心なるぞ。もふよいかげんに仏遊びはよしに召され」と。よしあしに付け子を思ふ親の慈悲心身にこたへ。「深ありがたいお詞を。もどくではなけれども。一旦仏の御弟子となり。破戒の罪科恐ろしければ。ひたすらお赦し下されよ」とおろ／＼涙に。不興をなし。「政ム、スリヤ破戒の罪は恐ろしく。仏に親を見かへるか。」「深ノウ勿体ない事おつしやります。親より外に大切な物あらふか。仏を拝むも父母の。

現世未来を祈りの為。」「政イヤサ無心の木仏頼まんより生きたる親が詞に付き、今日の前で還俗せよ。」「深サアそれは。」「政心に背かば不孝になるがや。」「深サア逆ものお慈悲に一兩年。」「政イヤ用捨はならぬ。」「深どふぞお赦し。」「政ハテならぬ」と。もつる論議に姉君は。いづれへ付かん浮れ船。心漂ふその折から。取次の侍罷り出。「近習後室様よりの上使として。三法師君を供奉し。真柴久吉入来也」と訴へて引つかへせば「政ナニ思ひも寄らぬ後室よりの御使。三法師殿を守護し心知れぬ久吉が入来とな。ム、何にもせよ油断ならず。皆々奥へ」と追つ立てやり。その身は座席に威儀繕ひ心

切

ゆるさず待居たる。

千輪の花の種は地中に朽ず。開く武門の棟梁たる。幼君三法師殿を補佐し奉り。入り来る真柴は四海の大鵬。ゆう／＼然と打ち通り。

互いに式礼席を定め。「三法師君未だ三才たれば。某差添として仰せ越さるゝその趣。今既に天下の御跡目。三法師殿に定まるとはいへど。禁庭より御不審の一条あるによつて。御家督の奏問遂げん事叶わず。サその御不審といつば。実相院殿より貴殿に預け置かれし蘭の方は。叛逆滝川が娘にあらずや。昔より叛逆人たる者。三族を断つて掟たる故、首討つて出されよと、先達てより仰せ渡さるゝ所。有無の返答遅滞召さるゝ事不忠たり。急ぎ首討ち渡されて。然るべし」とぞ嚴重なる。政

左衛門進み出。「政蘭の方は滝川が娘故。助け置かれずとの誑意、尤もなれども。将監は養父たり。実は某が娘なる事。上にもよく御存知の所。殊更三法師殿を産み参らせ。春忠公の御簾中に備はつたれば。上の為にも嫁子ならずや。さあれば禁庭へ助命の願ひ下さるとも。僻事にては候まじと。サ恐れながら存るなり」と。否む答に真柴久吉。「久イヤサ武將の御簾中。幼君の母君なればとて。その儘に差し置きなば。この後貴族高位の人々。いかなる罪あり逆も咎むる事叶ふまじ。賞罰を下だす源より。泥水を流しなば下つ方その泥水を啜りならつて、強き者はいよいよ強く威をふるはん。さすれば国家の愁いとならん。兎にも角にも息女の不運と諦め召され。イヤサか程の利害は久吉申す迄もなく。慮りなき貴殿にはあらねど。速の勇者も愛憐には。英気も砕けとろくる物か。ハテ。抛なき親子の道にてありけるよ」と。直ぐなる詞は肝先に。こたへる奇怪押し鎮め。「政実に誤つたり。この上は猶予なく。首討つて見参に入れ申さん。」「久ホ、ウ早速の領掌、拙者も安堵仕つた。恩愛のせつなる御心中は。察しながらも役目の表。過言は御免に預らん。」「政何さ／＼」と苦笑ひ。解けても解けぬ柳の糸。遙に高き下り枝を。目がけし蛙は一心不乱。飛上つてははたと落ち。落ちては飛付くその有様。政左衛門きつと目を付け。「政テ希代の業を見る事よな。伝へ聞く小野の道風。筆道を学べども中年に至るまで奥義を悟らず。ある時庭前の池の面。覆ひかゝれる柳の糸に。まつこの如く一つの蛙、水中より枝を望み。飛付く事

数ヶ度なりしが。始めはわづか三寸四寸。終に梢に至るを見て。道風是を手本とし。末世に名筆の誉を残す。それは優しき書道の励み。それには似ざるあの蛙、土から生じた匹夫を忘れ。大木にのし上らふとする不敵。イヤモウ及ばぬ事を。」と久吉を、尻目にかけてる詞のうち。ひらりと枝へ飛び付く蛙。過言の過ち。そしらぬ風情。

「**久**イヤナニ政左衛門殿。只今蛙が柳の枝に飛び付きしを見て思ひ出せば。某此下藤吉と呼ばれし時、柳といふ領地も得ず。アレアノ蛙同然に土にかつつくばひし下郎の昔、ガマタ貴殿は暫く民間に落ちて、鍵屋政左衛門といふ商人の養子となり。その名を付がれし政左衛門。鍵一筋の侍にも、腰をかざめし其元が。世に並びなき鏡山。百万石の大名となられしは、イヤモウ天晴れの御器量。是を思へばかの。蚯蚓でも、天上すべき事もあらふか。」「**政**やおんでもない事。時を得て龍と化し雲にひいつて。日の本を自由なさんはいと安し。」「**久**ハテ狭き限りや。その日の本を枕とし。唐天竺へも足手を延し。六十余州の諸大名に腰膝打たせんこの久吉。」「**政**ム、しかと貴殿が。」「**久**アイヤ其元が。」「**政**ム、」「**久**アハ、」「**政**ム、」「**久**アハ、」「**政**ム、」「**久**アハ、」「**政**ム、」「**久**アハ、」「**政**ム、」「**久**アハ、」「**政**ム、」と。互に心の卓量勇氣。主は詞改めて。」「**政**由無き事を無益の間答。蘭の方の御首渡すそれまでは。見苦しけれども。奥へござつて暫時の猶予。」「**久**ホ、ウ然らばあれにて吉相を相待ち申さん。後刻、」と式礼目礼。詞の意地を結び合ふ。草の庵の奥深く、引き別

ゝれてぞ入りにける。

こなたの一間。押し開けば。仏に仕ふ清光尼。永き日とても机、爪繰る。数珠の水晶恥んあてやかさ。頻伽の初音、鶯の。ほう法華経の声すめり。腰元どもはばら〜と。御用も暫し遠目鏡、我先へ。」「**小**エ、マア退きやいの〜。新参のくせ。何ぞといふと人一番。ちとマア人にも遠慮しやいの。」「**真**ヲ、それ〜そこで夕霜あんまりじや。夕べも夕べとて。御用仕廻ふて。衆しみの箱の物。明けて見りやちやつと先陣。夜の明けるまで握り詰。ほんにマアあた好な。後詰のわしには鼻明かしやつた」と。いへども一心眺め入る。」「**夕**アレ〜

軍が始まった。瀬田の陣に。二つ引きの旗の立つたは柴田方。ヲ、ヲ、アレ〜あそこへよい男が。ハ、ア何所へやら隠れてしもふた。エ、すかん。」と立退けば、跡へ小百合が入替わり。」「**小**ヲ、ヲ、テモマアすさまじい大軍じやのふ。そして粟津の方から引つ返すは筋太な紫おどし。アリアマア何でも大將分の人と見ゆる。あんな人の大太刀を請てみたい」とうらやめば。」「**真**先のは替り」と呉服が押し退け。」「**真**アレ〜山手の方から押寄するは。色もくつきり吉粋男。紋は何じや、結び雁がね、金の御幣の指物は、ヲ、アリア聞き及んだ柴田権六勝久様。テモマア評判の男程あつて立派な出立ち。ヲ、ほんにそふじや。コリヤ尼君様〜とかけ出すを。二人は引き留め。」「**小**コレ待ちや〜。そなた一人が合点して違ひないとは。ソリヤマア何が。」「**真**サイノいつぞや都で尼君様が。お見初めなさつた恋人は。アレ〜あそこにある柴田権六様じやはいのふ。」「**小**エ、そんならあなた

君様の。」「**夕**ヲ、そりや申し上げにやなるまい。サ

、皆ござれ〜。申し尼君様。」「**深**ヲ、騒がしい何事ぞ。」「**夕**イヤモ何事どころではござりませぬ。見へますはいな〜。」「**深**見る〜とはソリヤ何が。」「**夕**エ、モ落ち付きなさるも事による。あなたが都でお見初め遊ばした恋人は。柴田権六勝久様。この遠目鏡でついそこへ。」「**深**ア、コレ勿体ない。あじやらにもそんな事。いふ事ならぬといひ付けしに。エ、穢らはしい〜。」「

」「**夕**エ、ソリヤあんまりおきたい〜。仏も粋なこの世界。一目は大事、在原男。ちよつと〜」とむりやりに突きやり押しやる遠目鏡。是非なくかゝる因縁か。一目にそれと紛ひなき。」「**深**ヤア見れば見るほど紛ひもない。都で見初めた恋しい殿御。コレ申し深雪姫でござりますはいなあ〜と。我を忘れて尼君の。既に飛ばんずその風情。」「**小**ア、コレ申しあぶなふござりますはいなあ。あぶなふござりますはいなあ。下は崖ですつてんころり落ちたら血みどろちんがい。狸々が瘡瘡した様にマアおなりなさりようぞへ。遠目鏡で見れば。つい手に取る様に見ゆれども。爰からあそこは一里の余。羽がなければ飛ばれませぬぞへ。」「**真**ヲ、ソレ〜そしてあなたは仏の御弟子。浮世を捨てし尼御の身で。」「**深**サア世を捨てたもあの殿御故。いつそこがれて死にたいと。夜昼分かず泣き暮らし。思ひ切られぬ殿御をば。思ひ切つたるそぎ尼の。姿が今では恥づかしい。」「**小**エ、そんなら破戒遊ばすか。」「**深**ヲ、墮落した〜。」「**真**エ、すりや仏の罰も。」「**深**ヲ、いとほぬ〜いとやせぬはいのう。」「**真**扱つても我折れ。」「**深**

夕霜。「夕ハイ。」「深小袖持て。」「夕ハイ。」「深小百合」「小ハイ」。「深かもしの用意。サア、早ふ」と嬉しさに。いそ／＼浮／＼気はそゞろ、うはの。空焼く香染めの。袈裟も衣も忽ちに。縫の小袖に色直し。雪解け初むる紅梅の、花の顔ばせ鏡台に。向ふ鏡の思はくも。「何の儘よ」と一筋に。殿御をしたふ遠目鏡、思はず知らずかけ寄れば。かもしがすつぱり。「小ア、コレ申し。その様に遊ばすと。ねつから髪が結はれませぬ」と。引き留められても据はらぬ胸。恋路の闇に分け迷ふ、思ひをいつかその人に、斯くとは黄楊の。櫛取りも。手際立派に結び立てし。鏡に写る父の顔。「深ヤアと、様か」と不首尾さを。くろめかねたる端手小袖。「三人つまらぬ物を」と腰元ども。残らず次へ逃げて行く。

政左衛門笑みを含み。「政フウ以前の詞に替りし姿。粧ひなせしはエ、聞こへた。俄に思ふ方の出来しやらん。それこそ父が望む所。いかなる高位の公達にもあれ。聲に取つて得さすべし。サ、誰人なるぞ」と打ち解けて見へければ。親の手前の面はゆながら。「深アノ自らが殿御はナ。アノついそこに」「政ヤ、そこにとはどれ何所に」「深アイ。アノ遠目鏡に写る所に」「政フン目鏡に写るは瀬田の戦場。攻むるは真柴。防ぐは柴田。」「深アイその柴田のナ。」「政エ、勝久にてありけるか。ヤコリヤよい目利、出かいた」と。誉めらるゝ程恥づかしさ。袖打ちかざす花の顔。帰り咲せし姿なり。「政イヤモウ足利の聲とゆつても。恥づかしからぬ器量の若者。いよ／＼夫婦になりたいか。」「深

アイ斯申しますれば。と、様へは不孝なれど。もしこの願ひが叶わずば自害して相果てます。」「政ヲ、サ聞き届けた。然らば早く生害せよ。」「深エ、エ、何とおつしやる。スリヤこの願ひは叶ひませぬか。」「政ハテ親が赦して尽未来。夫婦になしてくるからは。早く冥途で勝久と。蓮の露の三々九度、ただいつ迄も。仲良ふ添ふてくれいよ」と。声打ちうるむに不審立ち。「深フンこの世にござる勝久様、未来で添へとおつしやるは。」「政ヲ、サ勝久はな。今日の軍に。討死をするはいやい。」「深エ、」とびつくり驚きながら。「深アノマア父上とも覚へぬ仰せ。いづれが勝つとも負くるとも。定めがたなき今日の軍。勝久様の討死とはへ。」「政ヲ、サ不審尤も。勝久軍に打つ立つといへど。本心は久吉に刃を合す心でない。かたくななる父勝家を諫めかね。所詮なき身と死を定め。戦場に命を落さんとする彼が心底。ガまつた実戦に挑むとも。なか／＼勝つこと思ひも寄らず。所詮この世で添はれぬ仲。極楽浄土で添ひ遂げよ」と。刀すらりと抜き放せば。飛びしさつて涙を浮め。「深はかない女、このか程迄。思ひ詰めたる心根を。不便とおぼし。一日なりと。」「政ヲ、サこの世で添してやりたさは。願ふ子よりも親の気は。百千倍のまさつてあるはい。それさへ叶わぬこの手詰。未練なせ」と振り上ぐれば。「深マア、待つて下さりませ。せめてお慈悲にお姿なりと。」「政ヲ、サこの世の名残に。ただ一目は赦してくれん。サアとくせよ」と身を捻ぢ背け。座を組めば。

むざんやな深雪姫。今日ぞ恋しきその人に。逢瀬

も待たぬ身は稲妻の。光はかなき今際の名残。急ぐもおしき遠目鏡、力なく／＼見渡せば。詩歌にやさしき八景も忽ち修羅の。瀬田の陣、寄せ来る勢は真柴方。その勢都合三万余騎。待ち設けたる柴田方。射手を揃へて差し詰め引き詰め。射かくる矢先は雨あられ。射すくめられて見へたる所。柴田権六勝久。今日討死の兜の緒、切先鋭に敵の中。瞬く内に人の山。目ざましかりける働きなり。またも後ろの山手より。皆紅の旗押し立て真一文字に突き入る後詰。鬼をあざむく勝久も疲れて武勇や弱りけん。次第に跡へぞ引いたりける。見る目もあはや。栗津の原。「勝思はず引いたかコハ無念。今は是迄一寸も引かじ」とこそは戦ふたり。見るに目もくれ心消え。あせるに甲斐も嵐に連れ、今まで見へつる戦場は霧一遍たなびいたり。

「深エ、今まで勝ちであつたもの。ア、取り巻かれてはもふ叶わぬ。日頃念じた観音様。大悲の力を添へ給ひ。勝久様を助けてたべ。斯くまで願ふにお情けない。劍の難を救ふとある。お経はうそか」と身をもんで。こがるゝ娘父はまた。義を金鉄とするどき刃。引きそばむれば手を合はせ。「深どぶぞ便りの知れるまで。赦してたべ」と伏しまるび。声を限りに泣き尽す、理り。せめて哀れなさしもの強氣もがばと折れ。「政ハ、ア迷ひに迷ふたな。所詮死すべきそちなれば。我が本心を言ひ聞かさん。元某は足利の庶流。今川が為に家断絶、その時我は五歳なりしを。由縁あつて岐阜の町人。鍵屋政左衛門に養育せられ。成長の後春永公に仕へ。今百万石を領すといへども。政左衛門

と名乗る事は、その恩義を忘れぬ証拠。アノ蘭の方
方はな。先政左衛門が実の娘。身共とはなきぬ仲。
スリヤコレ義理もあり恩もあるはい。さるによつ
て久吉に。無念の批判受けたれども。討つに討た
れぬその苦しき。爰の道理を聞き分けて。蘭の方
の身代りに潔ふ死んでくれ。ナコリヤ頼む。く。」
とせりかくれば。涙の顔を振り上げて。「深スリヤ
私に死ねとおつしやるは。姉様のお身代りに。」
「政ヲ、サその通り。聞き分けて死んでくれ。命をく
れよ深雪姫。」
「深いやじや、いやじやはいなあ。
とサアこの様に申したら。不孝なやつと父上や。
姉様のお憎しみは悲しいけれど。親兄弟より我が
身より、いとしい殿御に逢ふ迄は。何ぼふでも死
にやせんくくくく。死にとむないはいな
ア。」
「政ヤア聞き分けなきこな卑怯者。いつかな
助け置くべきか。ただ一討ち」と追い廻され。あ
なたへくぐりこなたへ抜け。争ふ折から。吹く風
と。ひびくこたまにありくと。「柴田権六勝久を
討ち取つたり」と。聞こゆるにぞ。
「深ヤアく、扱は討死遊ばしたか。ハア、悲しや」
とかつばと伏し、前後不覚に泣きけるが。
や、絶え入りしが、むつくと起き。「深申し父上様。
姉様のお身代りに。お役に立て、下さりませ。」
「政ヤ何が何と。」
「深サイナア申しく。勝久様のお
命のあるうちに。逢いたい見たいばつかりに。未
練なことを申しました。御堪忍遊ばして。早ふ殺
して下さりませ。切つてく」と。身を惜しまず。
差し付けられては中く。刀持つ手は大磐石。「政
チエ、口惜しやな。是まで数度の合戦に。思ふ敵
を組敷いて。何の苦もなく首掻きしが。今の我が

身に競べては。それも人の子人の親。幾千人の怨
念が。修羅の奴と身を変じ。今の我が身を責むる
か」と。子故の闇にかきくどき。父が嘆きを深雪
姫。ありがた涙の声を上げ。「深是程不孝な自らを
御不便深き御嘆き。冥加の程が恐ろしい。二世の
契りを樂しみに。冥途へ行くが嬉しいが。一世の
父に憂き別れ。それがかなしい」と。むせび
歎けば父親は。こらへこらへし溜め涙。包むとす
れど目にもる。涙くみ出すばかりなり。
姫は涙の顔を上げ。「深申しとく様。不便とおぼし
隙取るほど。却つて私が思ひの種。早ふ殺して下
さんせ。ご未練にござります」と恥しめられて政
左衛門。気を取り直し突つ立ち上がり。「政南無阿
弥陀仏」の声諸とも。首は前にぞ落ちにける。
悲嘆の涙打ち払ひ。首掻き抱き大音声。「政ヤアく
実相院の御使三法師殿。蘭の方の御首。いざ実檢
なれ」と呼ばはれば。こなたの襖ことくく押し
開かせて真柴久吉、弓手に高く幼君を。抱き傳き
なぐめに見やり。「久ホ、ヲいしくも致されたり。
さりながら幼君の御行衛、いつまで隠し召さるゝ
ぞ。御供あられよ足利殿」と。大地も見ぬく眼力
に。ちつとも臆せず。「政三法師殿を傳きながら。
幼君我が手にあらんとは。何を目当ての疑念なる
ぞや。」
「久イ、ヤ強くは陳じ申されな。御跡目評
議の折から。貴殿席を破つて立たれし後。三法師
殿行き方知れず。扱は諸侯の心を疑ひ。御辺守護
して帰られしとは知つたる故。年恰好もよく似た
る我が子の捨千代。仮に幼君と傳きしは。小田の
殿下をかためん計略。」
「政ア、イヤく、詞巧みに
言へばとて。直ぐなる者も子故には迷ふならひ。

終には主家も押領せんと。巧む族もまゝある事」と。
聞きも終らず抜き打ちに討つて捨千代。あへ
なき最期。足利覚へず横手を打ち。「政ハ、ア適
見事久吉殿。肉親の子を害し。忠義を磨くイヤモ
ウ古今の良臣。今こそ幼君手渡し申さん。それく
早く」と声の下。幼けなる幼君を、守護する袖は。
墨染めにかはり果てたる蘭の方。久吉かしこに打
ち向ひ。「久小田三代の大將軍。只今安土に御帰館
なるぞ。供奉の銘々相詰めよ」と。仰せの下に込
み入る諸軍。列を乱さず居並んだり。
若君装束とくくといと花やかに召しの駒。鞍は
金覆。りんくく。金鉄皆鳴る。鎧の袖ひらり
ひらく比良が嶽。怨敵退治の大將を。補佐する
真柴は鬼龍子の。雲を呑んだるその勢ひ。うつつ
甲斐なき鏡山、跡に。見なして出て行く。

※床本は、淡路の伝承本文に基づいて作成し、語句の単純
な誤りのみ原作正本に拠って訂正した。仮名遣い等表記
は、主に天満屋源次郎版の抜き本「比良嶽雪見陣立／三
の中庵室の段」「比良嶽三の詰／湖水庵室段」を参考
に、読みやすさを考慮して読点を付すなど、適宜手を加
えた。またルビは現代仮名遣いとした。なお上演に際し、
演者により多少詞章に変更がある点、了承されたい。

役割 (人形指導) 桐竹 紋寿

賤ヶ嶽七本槍 清光尼庵室の段

口 太夫 竹本 友和

三味線 鶴澤 友吉

切 太夫 竹本 友庄

三味線 鶴澤 友吉

太夫 竹本 友喜美

三味線 鶴澤 友勇

人形

深雪 (清光尼) 吉田 史興

蘭の方 坂東 千太郎

腰元夕霜 吉田 徳蔵

腰元小百合 橋本 千夏 (口)

腰元呉服 吉田 廣の助 (切)

足利政左衛門 吉田 新九朗

真柴久吉 吉田 徳蔵

三法師 (捨千代) 坂東 千太郎

近習 吉田 光太郎 (口)

馬 吉田 幸路 (切)

坂東 千太郎

〔淡路人形座・淡路の人形芝居復活公演〕

17:30 開演

ごあいさつ

中田 勝久

(財団法人淡路人形協会理事長・南あわじ市長)

① 講演

淡路人形浄瑠璃の代表作「賤ヶ嶽七本槍」

久堀 裕朗

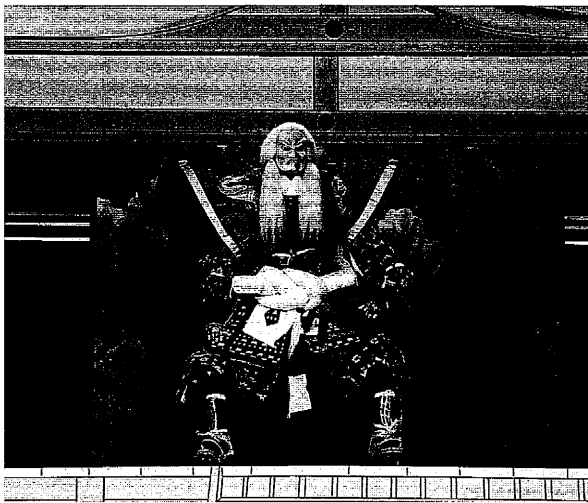
(大阪市立大学文学研究科 准教授)

——休憩——

② 復活上演

「賤ヶ嶽七本槍」「清光尼庵室の段」

淡路人形座



「勝久出陣の段」平成22年復活

淡路人形座・淡路の人形芝居復活公演
「賤ヶ嶽七本槍」「清光尼庵室の段」

編集 淡路人形座

〒六五六一〇五〇三

兵庫県南あわじ市福良丙九三六一二

電話 〇七九九一五二一〇二六〇

発行 財団法人淡路人形協会

〒六五六一〇三九三

兵庫県南あわじ市湊九〇番地一

(南あわじ市教育委員会)

生涯学習文化振興課)

発行日 二〇一二(平成二四)年二月十八日

定価 非売品

執筆分担者(掲載順)

中田勝久(淡路人形協会理事長) 二頁上

久堀裕朗(大阪市立大学文学研究科 准教授)

「賤ヶ嶽七本槍」解説・床本 担当

二頁下〜七頁